交流人口をいかに増やすか
日本大正村から学ぶ

人口減少時代の到来が言われている。二十年後、市の人口は五万七千人から四万二千人に、一万五千人減少するという推計もある。まちの活性化には、交流人口の拡大を図ることが欠かせない。外から多くの人たちに来てもらえるような仕掛けが必要だ。では、どうしたら交流人口を拡大することができるのか。

市内には約二十年前、同じ課題を抱え、住民がまちぐるみで取り組んだ事例がある。日本大正村だ。それまで観光客など皆無だったまちに、大勢の人が訪れるようになった。年間十数万人、ピーク時は五十万人を超えたという。

なぜ、多くの人たちが訪れるのか。日本大正村の取り組みに交流人口を拡大するためのヒントがあるのかもしれない。

観光地ではなくまちおこし

大正村では数少ない有料施設の一つ、大正村資料館を訪ねた。元は銀行の蔵だった建物で、中には民俗品など大正文化の香りが伝わる資料が展示されている。明治末期の建築物「大正の館」が併設され、大正ロマン館、大正時代館、おもちゃ資料館と合わせ、四館共通で料金は大人五百円という設定だ。

「いらっしゃいませ。ゆっくりしてってください」明るく迎えてくれた。神部美奈子さんと関山愛子さん。二人はこの日のボランティア当番。休憩所に案内してくれ、名物のシイタケ茶を勧めてくれる。

早速、単刀直入に尋ねてみた。「ほかの観光地と比べて、大正村の一番の違いは何ですか」。すると「観光地？」とけげんな顔をされ、「ここは観光地ではないですよ。まちおこしです」と返ってきた。いきなりカウンターパンチを食らったような衝撃だった。

「働いている者はほとんどがボランティア。施設の管理も売店も、掃除やガイドするのも全部地元の人間。中に展示してある物も、皆さんの善意で寄せられたものばかりです」

では、なぜボランティアに参加しているのかと問うと、少し間を置いて「ちょっとでも、まちづくりに貢献できればと思って」。

こうして話している間にも、お客さんはひっきりなしにやって来る。資料館入り口で料金を受け取り、休憩所に案内してはシイタケ茶でもてなし、館内の売店で土産物を売る。こうした時々にお客さんに声を掛ける。ちょっとした会話が生まれる。こうしたコミュニケーションは、非常に心地いいものだ。

「ガイドをすることが今では生きがいになっている。家に居てもテレビを見ているだけだから」と話す三宅喬雄さんは、牛乳屋さんで元町議会議員。設立当初からガイドを買って出て、ほとんど毎日、大正村役場の事務室に顔を出しては、団体客の予約が入ると大正村を案内している。大正村にはいろいろな人が来る。中には大学の教授など歴史の専門家もやって来る。「話をするには、一生懸命郷土の勉強をせざるを得ない」という。

「テレビか新聞にだまされて、よくおいでくださった。司葉子村長に代わって厚くお礼申し上げます」今日も名調子が響く。

地元の人がボランティアでガイドを務める姿は、今ではあちこちの観光地でも見ることができるが、恐らくその発信源は大正村だろう。

▲神部美奈子さん㊧と関山愛子さん㊨

まずはやってみよう

明智町に大正村の構想が持ち上がったのは昭和五十八年。国鉄が明知線の廃止を打ち出し、町は存廃問題への対応に追われていた。

大正村を提案したのは、「木曽路」などの写真文集で知られる長野県木曽郡日義村の故澤田正春さん。親交のあった明智町内の人を通じて、かねてから温めていた大正村の構想を町の関係者に打ち明けた。

「ありのままの町でいい。大正村の看板を立てれば、人は集まる」

しかし、この提案を聞いた役場や町の有力者、議員の大半は大反対。明智町が大正村をやる必然性はどこにもない。大正村は別に明智町でなくてもいいのだ。「新しい時代を迎えようとしているのに、大正と時代を逆行するとは何事か」さらに、よそ者である澤田さんへの警戒心もあった。「とんでもない話だ」「だまされているのではないか」「名義料を請求されるのがオチだ」

町は対応を明智町観光協会にゆだねた。観光協会は、澤田さんを招き、構想に耳を傾けた。「明知線を残すためには、どうしたら良いか」「光秀まつりをもっとにぎやかにしたい」「景気をよくするにはどうしたら良いか」

「どれも難しい問題。大変だね」と澤田さん。「まちが元気になるためには、よそから人を呼んで来なくていけません」

元町議会議員で新聞販売店を営む橋本泰明さんは、光秀まつりを立ち上げた当事者の一人。「確かに光秀まつりを始めたことで町民の活気はついたが、外から人が来るようなことは少なかった」と振り返る。

澤田さんは、人が集まるためには「ニュース性」「意外性」「中央性」が大切だと説いた。これを三種の神器と呼んだ。前出の三宅喬雄さんが解説してくれた。

ニュース性とは、放っておいても、宣伝しなくても、お客さんに明智に行ってみたいと思うようにさせること。

意外性とは、来てみたら、想像していたものと違うと感じてもらえること。よそのまねごとではだめ。ここには、明治村のような立派な物は

▲三宅喬雄さん

ないし、ほかから移築した物もない。何もない所だけど、あるがまま。先祖の歴史を大切にしようと住民のボランティア運動で、みんなで守っているのが大正村。

そして、外から人を呼ぶためには「明智町」ではだめ。町出身の人や親戚がいるなど、町にゆかりのある人はしれている。「大正村」とすることで、日本全国、東京の人も大阪の人も、だれもが関係ある。それが中央性。高峰三枝子さんや司葉子さんが村長を引き受けてくれたのも、「大正村」としたからだ。

「見ていてごらん。大正村になったら、来年の春には、人でごったがえすようになるから」と澤田さんは言い放った。

▲橋本泰明さん

三宅喬雄さんによると、明智町は観光バスが来たことのない町だったという。恵那峡や足助、馬龍などへ行くバスが通ることはあっても、立ち寄ることはなかった。「この町に観光バスが来るようになれば、町のみんなはびっくりするだろうな」当時は観光バスが来るような町になることは、考えられなかった。

観光協会では、連日、役員総会を開いて激論が交わされた。構想には賛否両論、むしろ反対派が多数を占めていた。ある一人が声高く叫んだ。「いっぺん、やってみたらどうだ。あかなんだら、やめればいい。まずはやってみようやないか」明知線が廃止されれば、過疎に拍車が掛かる。町の将来には、誰もが危機感を持っていた。昭和五十八年九月二十五日、明智町観光協会は全員総会を開いて大正村建設を決断した。

何もないけど心がある

観光協会は「大正村設立準備委員会」を立ち上げた。最初に困ったことは、お金がないことだった。何をするにも金がいる。しかし、町からの財政支援は期待できない。身銭を切ってお金を出し合った。一千万円の借金もした。委員会の主だったメンバー五人が連帯保証人になった。

さらに住民へ趣旨説明に走り回り、理解を求めた。大正村運動は町内に広まっていった。

昭和五十九年五月六日、準備委員会は立村式を行い、日本大正村の建設を宣言。五月二十二日には、明治三十九年の建築で昭和三十二年まで町役場として使用していた建物を譲り受け、「日本大正村役場」の看板を掲げた。

立村式を終えた準備委員会は、六月二十八日「日本大正村実行委員会」に衣替えをし、さらに町内から広く会員を募り、町を挙げてより強力な大正村建設運動へとシフトした。実行委員会は、企画、広報、総務、財務、文化、渉外の六つの委員会を組織し、正規の委員は百二十三人。当初、大正村の建設に反対していた人たちも上手に巻き込んでいった。前出の三宅喬雄さんは文化委員長、橋本泰明さんは企画委員長としてそれぞれ二十人ほどの委員を束ねた。

これらの動きにいち早くマスコミが呼応した。日本大正村の旗揚げがニュースとして流れると、町へ続々と人が押し寄せるようになった。受け入れの準備もできていない住民たちは戸惑った。「看板を立てれば、人は集まる」と言った澤田さんの言葉は的中した。

実行委員会による住民主導で町を挙げて動き出した大正村は、「何もない所だけど、心はある」と売り出した。

▲大正村役場

「明智町には古くから『ちょっとおんさい、よっとくんさい』とあいさつを交わす習慣がある」と橋本泰明さんは教えてくれた。「ちょっと来て、寄ってください」という意味だが、大正村はこの精神を受け継いだ。施設に立ち寄ったお客さんにお茶を出し、「お茶を飲みながら、ゆっくり話していきませんか」という雰囲気のまちであることを強調した。「大正村役場の入り口の所で戸惑っているお客さんが時々いる」と橋本さんは苦笑する。どこでお金を払って良いのか分からなかったという。観光客は施設に入るのは有料が当然と思い、無料であることに驚く。休憩所でお茶を差し出すとさらに驚き、恐縮して茶碗を片付けていく人もいるとか。

お金は出してももらわない

しかし、大正村には心があるといっても、それだけでお客さんを満足させるのは限界がある。大正村と呼ぶにふさわしい町並みの整備を急がねばならない。町も動いた。自治省の町づくり特別対策事業の採択を受け、昭和六十年から三カ年で整備を進めた。予算は三億六百万円。国の補助は二億六百万円で残りの一億円は地元負担が必要だ。当時の明智町の税収は年に五億八千万円、予算総額は二十億円だった。「町が一億円全部出すのは大変だろうから、半分はわしらで作ろう」実行委員会は資金作りに立ち上がり、寄付を呼び掛けた。住民や地元企業は、明知鉄道の第三セクター化に際して寄付金を出したばかりだったが、それでも実行委員会の呼び掛けに応えた。目標の五千万円には届かなかったものの、四千万円近くが集まった。人口七千八百人の町にとっては大金である。

▲秋の「大正村掃除に学ぶ会」は全国に広がりをみせる

日本大正村は、昭和六十三年四月十七日、高峰三枝子村長を迎え正式に開村した。日本大正村の大きな特徴は、言うまでもなく、町民挙げてのボランティアによる運営だ。全国各地から視察に来るが、「とてもうちではまねできない」と帰っていくそうだ。

橋本泰明さんに「大正村をやって良かったですか」と聞いてみた。「当たり前じゃないか」と即答で返ってくると思ったら、「良かったかどうかはまだ先。歴史が答えを出してくれる」と言われた。「ただ大正村は、大勢の人の協力と犠牲の上でここまで来ることができた。楽しかったし、多くのことを学ぶことができた」

大正村のもう一つの特徴は、全国各地に大勢の応援団がいることだ。財団法人日本大正村の二代目理事長、平林典三さんは「人の出会い、触れ合いを大切にしてきたから」と言う。大正生まれの各界著名人で作る東京大正会が早くから目を付け、会のふるさとにしようと動いてくれた。会員の一人だった高峰さんが村長に就任してくれたのもこの縁によるところが大きい。「金もうけのためだったら、誰も応援してくれない。住民みんながボランティアだから、私もボランティアでと応援してくれる」

▲財団法人日本大正村理事長・平林典三さん

貴重な資料や収蔵品を提供してくれている人も多い。大正村で展示されているものは、ほとんどが善意による頂き物と借り物ばかりだ。

恵那市で一日滞在できるメニューの工夫を

平林理事長に大正村の課題と交流人口を増やすための方策を尋ねた。理事長によると、昨年は前年比で一五パーセントも観光客数が落ち込んだという。天候不順と浜名湖花博などほかの集客施設にお客さんが分散したためと分析する。大正村に限った話ではないのかもしれないが、お客さんは減少傾向にある。これからは、同じ人が二度、三度と足を運んでもらう工夫、一人当たりの消費を拡大するための工夫が必要だと強調する。大正村の魅力を十分に伝えるためには、せめて二時間は滞在してほしいそうだが、一時間程度しか時間をとれないことが多いらしい。「下呂などへ行くついでに立ち寄るのではなく、恵那市で一日楽しめるメニューを作ることが大切。テーマや季節に合わせて、一つの物語になるようなメニューを開発しなければならない」

そして最後に力強く「これからは、恵那市の大正村として外へ向けて発信していきたい」と語ってくれた。

【参考】 朝日ブックレット「日本大正村　町おこし運動―明智町の変」（朝日新聞社）